

日本温泉科学会 25年の歩み

今年(1964年)はこの学会の創立が決ってから、丁度 25 年目に当る。ここに創立が決ってからと記したのは、昭和 14 年 6 月 12 日に学会創立の第一回世話人が開かれたが、その時に学会をつくる前段階として、温泉研究談話会という名前で当分運営しようということになったからである。しかし既にこの時に日本温泉科学々会という名称は決ったので、この時を以て創立の年とした。現在の日本温泉科学会と学の字が一つとれたのは、ずっと後のことで昭和 36 年 8 月 17 日の第 15 回大会の時からである。

日本の温泉学は昭和時代に入ってから急速に進歩しはじめ、昭和 4 年 7 月に東京科学博物館で温泉に関するあらゆる資料の展覧が行われ、同年に鉄道、内務両省と関係学識者、業界の人々の発議によって日本温泉協会が創設され、雑誌「温泉」が創刊された。昭和 6 年には九州大学が別府市に温泉治療学研究所を開設したが、これはわが国における温泉に関する最初の研究機関である。続いて同 10 年には北海道大学が登別温泉に、同 12 年には鹿児島大学が霧島温泉に、同 14 年には岡山大学が三朝温泉に、夫々温泉に関する研究、治療の施設を設けた。この間昭和 9 年には温泉医学気象医学に関する学者の集団である日本温泉気候学会(現日本温泉気候物理学会)の発足をみた。

以上のように温泉に関する研究の機運は着々と進み、その研究者の数も年と共に多くなって来た。しかしその何れも主として医学に関係するものが多く、広く温泉に関する科学の各分野を網羅した組織はなかった。こんなわけで昭和 13 年の暮頃から、温泉国日本における温泉研究者の横の連絡機関を設けてはという声が出た。藤浪剛一博士を中心に起りはじめ、その声の集結したものが日本温泉科学会として誕生したわけである。その第 1 回の創立世話人は、先にも記したように昭和 14 年 6 月 12 日に、東京霞ヶ関の当時の華族会館で開かれた。出席者は藤浪剛一、木村健二郎、岡田弥一郎、吉村信吉、江本義数、伊東祐一の 6 氏で、この席上で関係識者に発起人を依頼し、その人々の連名で入会の勧誘状を出すこと、東京帝国大学理学部化学教室に事務所をおくことなどが決められた。続いて 7 月 26 日に東京神田の学士会館で第 2 回の創立本義数世話人が開かれ、出席者は柴田雄次、木村健二郎、三沢敬義、伊東祐一、朝比奈貞一、江の 6 氏で、世話人発起人の中から次の 12 氏を幹事に指名した。朝比奈貞一、伊東祐一、江本義数、岡田弥一郎、木村健二郎、菅原健、津屋弘達、平山崇、藤浪剛一、三沢敬義、宮部直巳、吉村信吉(五十音順)の各氏で、会務の分掌を編輯三沢敬義、会計木村健二郎、庶務岡田弥一郎ときめ、第 1 回研究談話会を 10 月 7 日に開催することにした。

第 1 回幹事会は 9 月 20 日学士会館で開催され、藤浪、木村、三沢、岡田、朝比奈、津屋、宮部、江本、吉村、菅原の 10 幹事と、黒田和夫、上村三男の氏が出席した。藤浪博士を座長に推し、各幹事の紹介があり、木村幹事から温泉研究談話会発会趣意書及び入会勧誘状発送の報告があり、同日現在入会申込者 183 名と報告された。第 1 回研究談話会は創立記念講演会として 10 月 7 日に開催することとし、その細目を話し合い、第 2 回講演会を 12 月中旬に開催すること、かねて入選中の会長に東京帝国大学名誉教授中村清二博士を推せんすることなどがきまった。

創立記念講演会は 10 月 7 日、東京上野の科学博物館講堂で開催され、中村会長の開会の辞、岡田弥一郎博士の「日本の温泉動物について」、藤浪剛一博士の「日本温泉治療学の発達史」なる 2 講演があり、映画「健康は温泉から」、「聖地高千穂」の 2 巻が上映された。来会者約 80 余名を数え、初めての試みとしては盛況裡に閉会した。第 2 回の幹事会は 11 月 16 日、学士会館において中村会長、藤浪、木村、朝比奈、江本、伊東、吉村、黒田、村上の各氏が出席し、講演者の原稿を載せるため、「温泉研究談話会誌」を発行することとし、又会員名簿を作製することにした。11 月 10 日現在の入会申込者数は 230 名であった。第 2 回講演会は 12 月 7 日東京神田の鉄道博物館講堂で開かれ、菅沼市蔵博士の「硫黄泉を巡る」、高安慎一博士の「天然温泉の特異性について」の 2 講演と映画の上映があった。第 3 回講演会は、15 年 2 月 12 日神田淡路町の東京医師会館講堂で、中村左衛門太郎博士の「温泉と地球物理学」という講演があり、続いて

第4回講演会は、3月30日鉄道博物館講堂で、武田軍治氏の「温泉保護の法律的方法」、三沢敬義博士の「温泉療法について」の2講演と、映画「青年徒歩旅行」、「勤労の村々」の2巻が上映され、第5回講演会は6月20日、鉄道博物館講堂で、木内信蔵氏の温泉および温泉「聚落の地理的分布」なる講演及び映画「温泉風物誌」と「鉄輪」の2巻が上映された。この頃になると講演会場をどこにするか、その借用在段々困難になって来た。

半年ぶりに15年6月25日、第3回幹事を東京銀座の交詢社で朝比奈、伊東、江本、岡田、木村、黒田、菅原、藤浪、三沢、吉村の10幹事が出席して開催し、既定方針に従い出来うれば16年1月から学会が発足出来るよう、準備を進めることにつき話し合いをした。当時の年会費は1円で、「既納会費1円は14年分とし、本年分1円を徴集し計2円とし、これを以て既発行号及び本年度発行予定号に対する会費とす」と記録されている。25年の間に本会の会費は1,000倍になったわけで、まことに隔世の感がある。この時に会計報告がされたが、その記録は残っていない。入会者は益々増加し43名を加えている。第4回幹事は9月13日、同じく交詢社で朝比奈、伊東、江本、木村、黒田、菅原、藤浪、三沢、宮部の9幹事出席の下に開かれ、当時のわが国の状況として、16年1月から学会への改組が困難ではないかということが憂慮され、各幹事の一段の努力が要望された。しかし会員は更に16名の入会が報告されている。第5回幹事は9月25日、鉄道博物館会議室において朝比奈、伊東、江本、木村、藤浪、黒田の6幹事出席の下に開かれ、伊東幹事から学会への改組、学会誌発行の見通しがついた旨の報告があり、引続いて同館講堂で第6回講演会を開催し、山田醇氏の講演「温泉旅館雑感」と映画2巻が上映された。この時に新入会者32名が報告された。第6回幹事は11月9日東京日比谷の陶々亭で開かれ、中村会長、朝比奈、伊東、江本、木村、黒田、菅原、藤浪、三沢、宮地の9幹事が出席し、研究談話会を学会に改組の件を決め、事務所を文部省専門学務局科学課内に移した。第7回幹事は11月27日鉄道博物館会議室において開かれ、中村会長、朝比奈、伊東、江本、岡田、黒田、菅原、藤浪、宮部の8幹事が出席し、学会名を正式に日本温泉科学学会と決定し、会則原案を若干修正の上、可決した。同日同所で第7回講演会を開催、野口喜三雄博士の「本邦間歇泉の化学的研究」なる講演と映画「海底の鉄路」「ミュヘン科学博物館」の2巻が上映された。第8回幹事は12月8日学士会館において開催、中村会長、朝比奈、伊東、江本、岡田、木村、黒田、菅原、平山、宮部の9幹事が出席、学会誌を温泉科学と命名し、寄稿規定原案を審議の上、一部修正して可決、中村会長の指名により温泉研究談話会幹事全員が学会の理事に、藤浪博士が副会長に、理事のうち木村、三沢、岡田、江本、伊東の5氏が常任理事に決定された。この間に「温泉研究談話会誌」は第1号(14年11月)から第7号(16年1月)まで発刊され、夫々第1回から第7回までの講演会の講演が掲載され、「温泉科学」に発展的解消をした。

学会に改組された昭和16年は、わが国が第2次世界大戦に突入した年で、刊行物の統制、雑誌の併合、用紙の配給などが強化されて、学会運営に色々な障害の多くなって来た時代で、当時の役員の労苦は並々ならぬものがあつた。内務省(ここで出版物の検閲をしていた)や、用紙の配給会社に足を運ぶことも再三で、その当時の奥付に会員番号222206とあるは、その名残りである。定価1部1円、半年2部2円(郵税共)1年4部4円(郵税共)とあり、次に㊦と記され、広告料1頁30円、特別欄50円で中々高額のものであつた。その教字は壹、貳、参という文字が用いられ「単ニ御申込ノミノ節ハ振替用紙郵送可仕候間御送金下被度候」にいたっては現代の人々に解しがたいものがある。これが20数年前のことである。

改組後の第1回講演会は16年1月27日、慶応大学医学部附属病院講堂で、茂木蔵之助博士による「創傷に対する温泉療法」なる講演があり、第1回理事会は2月1日銀座交詢社において中村会長、藤浪副会長、朝比奈他10理事出席、事務分掌を編輯を朝比奈、江本、庶務を岡田、伊東、会計を木村の各理事と決定した。第2回講演会は3月10日神田の結核予防会講堂で、小林儀一郎博士の「本邦温泉の地質的分類並びに温泉湧出と地質構造線の関係について」なる講演があり、第2回理事会は3月29日交詢社において中村会長、藤浪副会長、朝比奈他6理事出席、会誌の内容、構成、会名、誌名の改訂などを決め、出版文化協会加入の件について相談した。第3回講演会は5月10日、学習院において江本義数博士の「日本の温泉

植物について」なる講演があり、続いて同所で第3回理事会を開催、伊東他5理事出席会誌発行について事前に当局の了解を得ることとし、この点については5月19日江本、伊東両理事が、内務省検閲課に出向いて了承を得た。第4回理事会は9月13日、交詢社において藤浪副会長、朝比奈他5理事出席、会誌第一巻第一号創刊に関する報告、前記の出版文化協会加入手続きは7月14日に岡田、伊東両理事が同協会に出向いて手続きを行った旨報告があった。旧学術講話会管理者今村繁三氏から同会基金の利子を今後本会に寄贈する旨申出があり、本会はその厚意を容れ、会則第6条第3項によって同氏を名誉会員に推せんした。第4回講演会は12月4日、東京医師会館講堂において増山元三郎博士の「気象病について」なる講演があった。

第5回講演会は17年3月28日に東京科学博物館講堂において、松尾武幸博士の「温泉の刺激と生体の反応」、岩崎岩次博士の「温泉化学上の二、三の問題」なる講演があった。第5回理事会は同日同所会議室において中村会長、伊東他4理事出席、庶務、会計担当者から夫々の報告があった。第6回講演会は6月8日、慶応大学医学部講堂において小穴進也博士の「温泉の重水濃度」なる講演があり、第6回理事会は9月28日に日比谷東洋軒において中村会長、藤浪副会長、江本他7理事出席、昭和18年度から会費年額4円(16、17年度は3円であった)に値上げを決定した。本会創立の功労者であった副会長藤浪剛一博士はかねて病氣療養中のところ、11月29日逝去され、12月2日の告別式には本会を代表して中村会長が弔辞をおくられた。第7回理事会は12月18日、日比谷東洋軒で開かれ、中村会長、江本他3理事出席、藤浪副会長の後任に江本義数博士を推せん。同時に同氏を出版文化協会の本会代表者に決定した。又かねて第1回理事会の際に評議員は会長から候補者を指名し、その諾否を得ることとしていたが、11月下旬までに、石橋雅義、岡田武松、衣笠豊、小林儀一郎、高安慎一、武田軍治、築地宣雄、野満隆治、福富孝治、藤原咲平、松尾武幸、松山基範の12氏が快諾された。第8回理事会は18年5月22日、本郷の鉢の木で開かれ、中村、江本正副会長、朝比奈他5理事出席、出征会員は会費を免除すること、藤浪理事の後任に春名英之博士を決定した。第7回講演会は6月26日、東京帝大理学部化学教室において、木村健二郎博士の「引湯による温泉成分の変化数例」、広瀬孝六郎博士の「温泉工学について」なる講演があり、第8回講演会は9月8日、東京帝大理学部化学教室において小穴進也博士の「湯俣温泉について」なる講演があった。

この通算15回の講演会と第8回理事会を以て、わが国の当時の戦局の事情から、本会の運営も困難となり、一部の事務的な面を除いてその運営停止を余儀なくされた。この間に会誌は第3巻3号(18年9月30日)まで発行され、次の諸論文が掲載された。

第1巻第1号(昭和16年3月)

〔原著〕 岡田弥一郎、河西芳一：温泉に棲息するオンセンアブ(*Stratiomyia Japonic* u. d. Wulp)の生態学的研究(1)

江本義数、米田勇一：奈良県下二温泉の細菌及び藻類(1)

〔綜説〕 野口喜三雄：本邦の間歇泉の化学的研究

第1巻第2号(昭和16年6月)

〔原著〕 岡田弥一郎、河西芳一：第1巻第1号に同じ(2)

江本義数、米田勇一：第1巻第1号に同じ(2)

〔綜説〕 小林義一郎：本邦温泉の地質学的分類、並に湧出機構と地質構造線との関係について

第1巻、第3、4号(16年9、12月)

〔原著〕 五味武郷、藤巻時男：入浴と体重との関係

伊東祐一、上林三男：日本に於ける温泉動物の研究(XXXI)、諏訪、赤沼及び下部温泉の動物相。

黒田和夫：山梨県増富鉱泉の微量成分に就て。

今井秀雄、櫛田敏也：鳴子濁沼鉱泥を利用せる鉱泥纏包法。

〔綜説〕 江本義数：日本産温泉植物に就いて

第2巻第1号(17年3月)

〔原著〕今井秀雄, 櫛田敏也: 鳴子臨時分院に於ける温泉反応に就いて

玉木正男: 淡水温浴の人体呼吸代謝に及ぼす影響.

江本義数, 広瀬弘幸: 日本産温泉植物の研究(XV), 宮城県中山温泉の細菌類及び藻類.

〔綜説〕高安慎一: 満州の温泉瞥見所感, 附興安嶺下の名湯ハロンアルジャン

第2巻第2, 3号(17年9月)

〔原著〕五味武郷: 入浴部位の高さによる血圧並びに肺活量に就いて,

伊東祐一: 天然温泉に抛る特異作用の起因に就いて, 第1編, 植物試験を通じて見たる温泉水の特異作用

江本義数, 広瀬弘幸: 日本温泉植物の研究 XXI, 栃木県塩原温泉群の細菌類及び藻類(1), (2).

北村大蔵: 新旧温泉の比較.

〔綜説〕松尾武幸: 温泉の刺激と生物の反応.

岩崎岩次: 本邦温泉の主化学成分の分布.

第2巻第4号(17年12月)

〔原著〕有井友清, 北川周三, 五味武郷: 温泉の心臓に及ぼす影響(レ線キモグラフィ的研究)

伊東祐一: 天然温泉による特異作用の起因に就いて, 第2編 重水濃度を異にする温泉水の植物体の発芽生長に及ぼす影響.

江本義数, 広瀬弘幸: 伊豆半島温泉の温泉植物, 1, 東海岸温泉群の細菌類及び藻類.

第3巻第1号(18年3月)

〔原著〕江本義数, 広瀬弘幸: 伊豆半島温泉の温泉植物, 2, 南部温泉群の藻類(1), 3, 北部温泉群の藻類(1).

野口喜三雄: 本邦間歇泉の化学的研究, 4, 新潟県松之山温泉の研究

〔綜説〕小穴進也: 温泉水の重水濃度

第3巻第2, 3号(18年9月)

〔原著〕江本義数, 広瀬弘幸: 伊豆半島温泉の温泉植物, 2, 南部温泉群の藻類(2), 3, 北部温泉群の藻類.(2)

伊東祐一: 天然温泉に抛る特異作用の起因に就いて, 第3編 温泉水を用いたる2, 3の生物学的試験. 久保田昭亮「カルシウム」代謝に及ぼす温泉の影響, 1, 温泉地児童の体型並に歯牙の統計的研究.

〔綜説〕斎藤信房, 朝鮮の温泉

当時の会員数は399名を数え, 内名誉会員1名, 特別会員18名であった. 役員は会長中村清二, 副会長江本義数, 理事は編輯担当朝比奈貞一, 江本義数, 庶務担当, 岡田弥一郎, 伊東祐一, 藤巻時男, 会計担当木村健二郎, 黒田和夫の各氏の他, 菅原健, 津屋弘達, 平山高, 三沢敬義, 宮部直巳, 吉村信吉の6氏で, 評議員は前記の12氏であった. 会計状態は昭和16年度が収入1,272円79銭(内前期繰越金77円57銭)支出1,272円77銭(内次期繰越金461円47銭), 昭和17年度は収支各々1,540円76銭であった.

戦後わが国の状態は虚脱と混沌の域を脱することが出来ず, 本学会の再建も容易なことではなかったが, 役員並びに会員各位の絶大な協力によって, あらゆる困難を克服して, ついに23年5月1, 2両日兵庫県城崎温泉に於て, 本会創立以来の最初の大会であり, 戦後初めての集りである第1回大会を開催することが出来た. この開催に当っては当時の日本温泉協会副会長西村佐兵衛氏の力に負うところが大きかった. 時はよし, 所はよし, まだ交通, 食糧事情など甚だ不良な時代ではあったが, 北は北海道, 南は九州から会するもの70余名, 加うるに町内有志の参加もあり余り広くない公会堂は満員の盛況であった. 伊東評議員の開会の辞にはじまり, 会長挨拶(代読), 各担当幹事の会務報告, 会則改訂, 役員選出, 続いて

27 題の研究発表と太秦北大教授の「温泉の変化について」なる特別講演を以て第 1 日を終り、第 2 日目は町当局者の案内によって、温泉地内の各源泉、浴場などを視察した。会誌の復刊は 1 年おくれ、24 年 7 月 20 日に第 3 巻 4 号の発刊を見、爾来今日に及んでいる。尚戦前のバックナンバーは非常に少いので、その掲載演題名を前に記したが、再刊後のものについては省略した。

戦後はじめて正確に会員数が記録されたのは、24 年 5 月 31 日で、その時は 463 名に上っていた。第 2 回大会は 24 年 8 月 5、6 両日、長野県野沢温泉村役場会議室で開催され、出席者 20 数名、演題 13、岡山医大関教授の「本邦温泉水の酸化還元電位と硫化物の作用」なる特別講演があり、5 日夜は地元有志と会員の座談会が開かれ、第 2 日は当温泉に於ける顕著な湧出口である麻釜をはじめ、源泉、公衆浴場の視察をした。尚、評議員会に於て、かねて老令の故を以て辞意を申出た中村会長に代って東大木村教授が会長に推せんされ、10 月 1 日に就任した。第 3 回大会は 25 年 4 月 10、11 両日、和歌山県勝浦温泉小学校講堂で開催され、出席者 30 余名、演題 19、第 2 日目は勝浦湾内及び島々の湧泉をモーターボートの便をかりて一巡視察を行った。

昭和 26 年は学会が創立されてから 10 周年に当り、その前段階である研究談話会の発足から数えて 12 年目にあたったので、同年開催の第 4 回大会は、特に慶応大学の藤巻博士の肝入りで、同大学の温泉研究所所在地伊豆の嵯峨沢温泉で陽春 4 月の 7、8 両日、上狩野中学校講堂を会場として催された。会する者数 10 名、出演題数も 17 を数え、特に前会長中村博士のメッセー、伊東評議員の「日本温泉科学学会小史」なる講演があり、中々盛大であった。又、前夜開かれた評議会で、会費値上げ (300 円)、会長、副会長の交代) 木村東大教授から高安国立別府病院長へ、江本学習院教授から岡田資源科学研究所副所長へ、中村前会長を名誉会員に推せん、新評議員に瀬野錦蔵、松永周三郎、斎藤省三の 3 氏の選出などが決り、翌日の総会で可決された。閉会后慶大温泉研究所 (月ヶ瀬所在、その後颱風禍によって流失) 見学、湯ヶ島温泉木太刀の湯視察を行い、翌 8 日は東海バス、村当局、慶大温研の配慮による大型バスで奥伊豆温泉 (蓮台寺、下加茂、峯など) 巡りを行って解散した。

これより先、学会の再発足に際して会則が変更され理事を廃し、評議員をおくことになり、次の 24 氏が選出された。伊東祐一、岩崎岩次、太秦康光、江本義数、木村健二郎、岡田弥一郎、大島良雄、大塚弥之助、黒川利雄、柴田雄二、関正次、高安慎一、武田軍治、中村清二、八田秋、春名英之、平松博、広瀬孝三郎、福富孝治、藤巻時男、松尾武幸、松浦新之助、三沢敬義。

第 5 回大会 (会長高安慎一博士) は 27 年 7 月 20、21 両日大分県由布院温泉山水館ホールで開催され、出席者 60 余名、演題 24 の多きに達した。第 1 日は高安会長の開会の辞について来賓井手大分県衛生部長、地元由布院町長の歓迎の挨拶があり、順を追って研究発表が行われ、午前の部を終り、午後の総会に於て前夜の評議員会で決定した版代半額の投稿者負担、九大温研矢野教授の評議員承認などあり、続いて京大火山温泉研究所瀬野錦蔵博士の「別府温泉について」の特別講演、及び午前の部について研究発表が行われた。今迄になく質疑応答活発に行われ、閉会は定刻 5 時を遙かに過ぎ 6 時を廻っていた。夜は有志代表による和気霽々たる歓迎会、前庭に青年団男女による盆踊が繰り広げられ、会員一同、由布盆地の涼風に夏を忘れての楽しみを満喫することが出来た。翌 21 日は地元の厚意による特別仕立のバスで由布院地内の湯の坪、金鱗湖、千人風呂、石松地獄、八山温泉地帯を見学の上、大分県の誇る観光コース、由布院、耶馬溪、中津、宇佐、別府のエキスカージョンを行った。

第 6 回大会 (会長高安博士) は 28 年 7 月 20、21 両日、福島県飯坂温泉で開催され、出席者約 90 名、演題 35、講演会は町公会堂で開かれ傍聴者を加えると聴衆は 150 名余りの多数に及んだ。午前中は一般講演、午後の総会に於て前夜の評議員会で決定した明年度開催地 (花巻温泉) の件、会長改選 (高安慎一博士から慶大教授春名英之博士へ) 黒田和夫博士渡米のため評議員辞任代って野口喜三雄博士の選任、新たに足沢三之介、杉山尚、南英一の 3 博士を評議員に選任の件を可決した。一般講演を挟んで特別講演という形式がとられ、前者には東北大学教授渡辺万次郎博士の「福島県特に飯坂湯野温泉の地学的概観」、後者には福島大学長大里俊吾博士の「東北、北陸とところどころ」なる講演が行われた。夜は歓迎懇親会が

開かれ、飯坂町長の歓迎の辞、地元幹事東北大鳴子分院杉山助教授の挨拶、高安会長の謝辞、春名新会長就任の辞について、弥生流宗家福島県衛生部地上業務課長の剣舞「白虎隊」の披露があり、一同その入神の技にみいった。翌21日は地元観光協会役員の案内で、特別仕立のバス2台に分乗して飯坂温泉から福島市、土湯温泉、野地温泉、横向温泉、中の沢温泉、沼尻温泉、桧原湖、五色沼、猪苗代湖、野口英世生家、白虎隊遺跡、若松市、東山温泉と、延べ100軒にも及ぶ福島県自慢の観光コース、磐梯朝日国立公園温泉地帯の視察を行った。

第7回大会(会長春名博士)は29年7月19, 20, 21の3日間、岩手医大足沢教授が地元幹事として岩手県花巻温泉で開催された。出席会員80余名、一般演題39、特別講演3、会期の3日間、演題数の多いこと、何れも従来のレコードを作った。花巻温泉公会堂を会場に、第1日目は列車の都合などのため午後から開催、会長挨拶について17題の発表があり、終って天然色スライド「岩手の温泉」映画「中尊寺」の映写があり、引続いて一般公開座談会を開いた。この座談会は従来に増し規模の大きいもので、温泉業者、管理者、監督官庁、一般傍聴者など多数出席して、極めて熱心な質疑が行われた。これに対して伊東評議員司会の下に、高安、瀬野、江本、野口、初田の5博士により各専門分野からの明快な解答が与えられ、出席者に多大の感銘を与えた。第2日目は午前中一般講演並びに特別講演「岩手県温泉の地球化学的研究」東京都立大教授野口喜三雄博士、午後総会、続いて岩手県医師会長佐藤博士による「花巻温泉郷の歴史について」、次に一般講演を挟んで、最後に学習院女子短大教授江本義数博士の「日本の温泉植物」なる特別講演があった。講演終了後、歓迎懇親会に移り、岩手県知事、藤田岩手医大長、花巻市長から歓迎の挨拶があり、ついで春名会長から感謝の辞が述べられ、しばしくつろいで会員相互の間、又は地元の人々との間に交歓が行われ、酒宴は何時つくともなかった。翌21日のエキスカージョンには80名の会員が参加し、2台のバスに分乗、花巻温泉から花巻市に出て、志戸手、大沢、鉛の諸温泉を視察、再び花巻に帰り、国道を南下して水沢市に入り、高野長英生家、水沢緯度観測所を訪れた。更にバスは南下して平泉に入り、中尊寺に在りし日の藤原三代栄華の跡をまのあたりに見て、礎石のみ残す毛越寺の見学を終え、一関駅前に出て散会した。

当時の学会の状況を摘記すれば、会員数361名、会長慶大教授春名博士、副会長三重県立大水産学部長岡田博士、評議員は伊東祐一、岩崎岩次、太秦康光、江本義数、大島良雄、岡田弥一郎、木村健二郎、黒川利雄、斎藤省三、柴田雄次、杉山尚、瀬野錦蔵、関正次、高安慎一、足沢三之介、野口喜三雄、八田秋、春名英之、平松博、福富孝治、藤巻時男、松浦新之助、松永周三郎、三沢敬義、南英一、矢野良一の26氏であった。会費は年400円(賛助会費3,000円)に値上げされ、決算報告は次のようであった。収入前期繰越金59,625円、会費80,400円、別刷、組版代2,200円、バックナンバー売上代795円、広告料3,000円、寄附金10,000円、合計156,373円、支出会誌印刷代69,500円、郵送料9,400円、雑費4,554円、次期繰越金72,919円、合計156,373円、次期繰越金が多いのは当年度内に支払予定の印刷代が印刷のおくれで、支払られていなかったためである。

第8回大会(会長春名博士)30年7月24, 25の両日鹿児島大学医学部佐藤八郎教授を地元幹事として鹿児島市旭文化ホールを会場として開催された。温泉地以外の都市で本大会が持たれたのは、この時がはじめてである。出席者100余名、演題34、特別講演で、炎暑の南国で水柱に涼をとりながら、中々の盛況であった。第1日は会長、副会長共に事故のため欠席したため、地元幹事佐藤八郎鹿大医学部教授開会を宣し、午前中に一般講演11題と、特別講演「温泉の放射性成分特に温泉ガスの放射性成分について」、鹿大文理学部鎌田政明助教授があり、正午休憩時に記念撮影を行った。従来大会毎に記念撮影は行なわれているが、概ね会場又はその付近で撮影されたが、今回は特に西郷隆盛銅像前でされた。これは第2回大会の撮影が、麻釜に於て行われたと共に異色あるものというべきである。午後は総会につづいて特別講演「温泉浴と生体反応」鹿大医学部教授佐藤八郎、同助教授徳重敏夫両氏を筆頭に、一般講演7を以て終了、次に鹿児島県観光課提供の映画が上映された。第2日目は午前中一般講演9、東京大学教授大島良雄博士の「欧米温泉視察談」を以て終了、午後は霧島温泉方面のエキスカージョンに出発した。参加者43名、市内

の古蹟巡りを終って桜島に渡り、熔岩道路をドライブ、古里温泉を視察して大正熔岩を横切って大隅半島に達し、海岸道路を北上、姫城温泉、日当山温泉を経て新川溪谷妙見温泉で少憩、牧場を見学の上、日の沈む頃、霧島温泉に到着した。ここで一夕の懇親の宴が張られ、鹿大福田学長、知事代理島崎衛生部長、永田牧園町長、田平県医師会長の歓迎の辞があり、これに対し高安評議員が会員を代表して謝辞を述べ、盛会裡に充分の歓をつくすことが出た。

第9回大会(会長岡田弥一郎博士)は、31年7月14、15の両日、新潟大学医学部教授渡辺徹一博士が地元幹事として、新潟県松之山温泉で開催された。出席会員約60名、演題22を教え、講演会場は、旅館凌雲閣主人、県会議員島田久吉氏の好意により、同旅館大広間が無償で提供された。午前中は一般報告11題、新潟大学理学部の杉山隆二教授の「新潟県下温泉の湧出機構について」なる特別講演があり、午後は総会につづいて九州大学温泉研究所の矢野良一教授の「欧米6ヶ国の温泉視察」なる特別報告があり、この頃には会場には一般の傍聴者、特に多数旅館従業員の顔も見え、涼しい土地であり氷柱の用意もあったが、室内は人いきれで相当の暑さになった。午後の一般報告も予定時間を30分以上も超過し、最後の東京大学理学部木村健二郎教授の特別講演「本邦温泉の微量成分」は若干時間の短縮を余儀なくされた。夜は恒例の懇親会があり、翌15日のエキスカージョンは2班に分かれ、第1班は岡野町貞観園、第2班は十日町の機業陸社を見学した。

第10回大会(会長岡田博士)は32年7月16、17両日、松山市道後温泉宝荘で開催され、出席会員約60名、演題32が報告され、他に2題の特別講演があった。第1日午前中は一般発表、午後総会(この総会で会費100円値上げ本年度から500円となった。)について一般発表が行われた。同夜は同所で懇親会が持たれ、松山市長黒田政一氏の歓迎の挨拶、会長欠席のため会員を代表して松永評議員の謝辞があり、地元民謡伊予節、伊予万才の出演があり宴は快適に進行した。第2日目は午前中、前日に引続いて一般発表あり、その後愛媛大学高津寿雄教授の「道後温泉について」と題する特別講演があり、午後は九州大学温泉治療学研究所八田秋教授の「温泉分析と適応症」なる有益な特別講演があった。終って夕刻までの数時間を、遊覧バスによって松山市内石手寺、子規堂、工場地帯の観光、見学を行って最後に松山城に登って散会した。

第11回大会(会長九州大学名誉教授松浦新之助博士)は33年7月13日から16日の4日間に亘って、山形県上ノ山温泉で開催された。13日は開催地元の山形県業務課の要望によって、同地で本学会を記念する公開講演会及び座談会を行った、はじめての試みではあったが、好評を博した。同日夕刻村尾旅館会議室で評議員会が持たれ、昭和39年に本会創立25周年記念大会を開催することなど決議された。14日は準備委員長岡英彦氏の開会の辞、松浦会長の挨拶について研究発表及び特別講演「山形県の温泉について」を市村山形大学教授、服部中央温泉研究所長、杉山東北大教授が各々専門の立場から地質、化学、医学について、1時間余に亘って述べられた。午後の総会に於て厚生大臣、山形県知事祝辞、及び評議員会の議事が報告され、引続き研究発表と、最後に観光映画が上映された。同夜の懇親会は山形県知事、山形県温泉協会会長の歓迎の辞、松浦会長の謝辞にはじまり、次々と地元民謡の紹介などあり、頗る盛況裡に宴を閉じた。15日は午前中一般研究発表と「温泉水中の微量成分の地球化学」なる九大三角教授による特別講演があり、午後は「欧州の温泉を巡りて」なる北大斎藤教授の特別講演と一般研究発表、カラーズライドによる「山形程を終った。県の温泉紹介」が行われ、伊東副会長の閉会の辞を以て上の山温泉に於ける日同夜は席を蔵王温泉に移し、同地温泉組合の歓迎裡に各自所定の宿に入り、2日間の疲れを医した。翌16日は空中ケーブルによって蔵王登山、山頂山の家で中食後、下山して名刹山寺に立寄り、天童温泉に向い、温泉協同組合による源泉管理方式を視察し同地で散会した。

第12回大会(会長松浦博士)は34年7月16、17の両日長野県諏訪温泉片倉館を会場に開かれ、出席会員76名であった。開会に先立って前日の午後、昨年の例に慣い、地元の人々を対象に座談会が持たれ、大島東大教授、瀬野京大助教授、高津愛媛大教授らが講師となり、出席者は会員を含め120名の多きに達した。16日は午前、午後には亘って研究発表が行われ、その間に信州の温泉についての特別講演として、

「信州中部の温泉と地質」信州大小林国夫助教授、「化学成分から見た信州の温泉」信州大掛川一夫助教授、「諏訪地方温泉の化学的研究」東京都立大野口喜三雄教授が行われた。同夜の「浜の湯」に於ける懇親会は諏訪太鼓、御桂小唄が紹介され、出席者90余名、なごやかな空気がただよった。17日も午前、午後を通じて研究発表が行われ、その間に信州大赤羽治郎教授による特別講演「飲酒時入浴の医学的考察」があった。18日のエキスカーションは生憎の小雨ではあったが、霧ヶ峯強清水に登り、又、上諏訪温泉最大の源泉七ツ釜、諏訪神社下社秋宮、ヤシカカメラ工場、精工舎時計工場を見学して上諏訪駅前で散会した。昨年末の会員数は301名であったが、本年は323名に増加した。

第13回大会（会長京都日赤第一病院長松永周三郎博士）は35年7月18、19、20の3日間、広島県湯来温泉で開催され、出席者は約120名であった。開会に先立って前日、広島大学教育学部大講義室に於て一般講演会を開催、県衛生部溝口薬務課長の「広島県の温泉について」、広島大学梅垣教授の「広島県下の鉱泉探査の実際について」、広島大学小倉教授の「広島県湯の山温泉について」と題する3講演があった。18日は会長欠席のため代って伊東副会長の開会の辞、広島大学豊田助教授の「広島県の温泉」の紹介について研究発表が行われ、午前の日程の終りに総会が開かれ、次回開催地を草津温泉と決定、新たに広島大学教授梅垣嘉治、九州大学温泉治療学研究所教授伊藤嘉夫の2博士が評議員に選任された。午後は北海道大学教授福富孝治博士の「北米イエローストン地域、ラッセン火山地域等の温泉について」なる特別講演と一般研究発表あり、同夜は河鹿荘に於て懇親会が開かれた。19日は午前中一般研究発表、午後は岡山大学温泉研究所教授森永寛博士の16mm映画を使用しての「温泉治療の実際について」なる特別講演と一般発表が行われ、最後に大会準備委員長、梅垣広島大教授の閉会の辞を以て終了した。20日には50名の会員が参加して貸切バスによる一日行程のエキスカーションを行った。途中湯の山温泉の源泉視察を行い、一路宮島口に向い貸切船で宮島に渡り厳島神社、紅葉谷、などを一巡し中食後、バスによって府中町所在の東洋工業 K.K.を見学、広島に出て平和記念公園、原爆資料館観覧、原爆慰霊碑原爆の子の像を見、比治山に登って市内を展望、夕刻広島駅前解散した。年度末の会員数に336名となった。

この年に特記しなければならないことは、本会創立と同時に初代会長に推され、爾来10年の長きに亘って会長の職務にあり、しかもその間はわが国の未曾有の時期に際し、あらゆる困難を克服して学会の基礎を確立された、中村清二博士を失ったことである。90才の天寿を全うせられたとはいえ、本会にとってはおしみて尚余りあるものがあった。

第14回大会（会長松永博士）は36年8月16日から19日に亘って、群馬県草津温泉で開催された。16日午後には大阪屋旅館で座談会が催され、出席者約30名、各講師との間に活発な質疑応答があり、温泉の一般知識の向上に資する点が多かった。同夜評議員会を開催、次期開催地を三朝温泉と決定、会長、副会長の任期満了になったため、夫々南英一、伊東祐一の両博士が選任され、又、会名変更が決定された。17日は草津中学校体育館を会場に、出席者150名参加の下に、特別講演1題シンポジウム及び一般研究発表23題、総会が行われた。本総会に於て昨夜評議員会で決められた3件が可決された。ここに本会は日本温泉科学会と改称され、学の一字がとれた。夕刻、有名な草津温泉時間湯を見学し、同夜懇親会が開かれ、その席上草津温泉観光映画を観賞した。18日は午前中に残りの一般研究発表と特別講演1題を終了し、午後は貸切バスで殺生河原に向い、次いで草津自漫の町営ロープウェイで白根登山、湯釜見学を行い、万座温泉に向い、万座観光ホテルに一泊した。19日は万座温泉を後に、鬼押出し、東京大学浅間山観測所を見学し、軽井沢に出て解散した。

15回大会（会長上智大学理工学部長南英一博士）は37年8月20日から23日まで、鳥取県三朝温泉で開かれ、20日の評議員会で年会費を800円に値上げすること、次年度は7月中旬、湯瀬温泉で開催することが決められた。21、22両日は温泉会館を会場に、特別講演、一般研究発表、シンポジウム、座談会、映画会など多彩な催しが行われ、参会者150~160名の多数に上った。23日のエキスカーションは人形峠、大山の二班に分れ、夫々数10名の参加があった。

16回大会（会長南英一博士）は38年7月17日から20日まで、秋田県湯瀬温泉で開かれ、17日夜の評

議会で、会則が一部改訂され、副会長を廃し、会長の任期が1年となった。又、新たに名誉会員として江本義数、大橋良一、岡田弥一郎、木村健二郎、柴田雄次、関正次、高安慎一、西川義方、松浦新之助、松永周三郎、三沢敬義の11氏が推せんされた。評議員の改選も行われ新評議員として、赤羽治郎、伊東祐一、伊藤嘉夫、今井英夫、岩崎岩次、太秦康光、梅垣嘉治、梅本春次、大島良雄、高津寿雄、斎藤幾久次郎、斎藤省三、斎藤信房、佐藤八郎、下方敏蔵、杉山隆二、杉山尚、瀬野錦蔵、足沢三之介、中村久由、野口喜三雄、八田秋、初田甚一郎、服部安蔵、春名英之、平松博、広瀬弘幸、福富孝治、藤卷時男、益子安、三角省三、南英一、村上悠紀雄、森永寛、矢野良一、渡辺厳一の36氏が選出され、新評議員の互選により、次期会長に伊東祐一氏が選ばれた。尚、今回は白浜温泉で36年7月開催と決定した。湯瀬ホテル大広間を会場に、午前中11題の一般発表、午後は総会、シンポジウム、一般発表5題で終了、夜は懇親会を開催した。19日午前中は昨日に引続いて一般発表が行なわれた。午後の玉川温泉へのエキスカージョンは生憎の濃霧と小雨で沿道の風光を十分観賞することが出来ず、玉川温泉着、直ちに北投石産地、大沸など見学を行った。20日も天候不良であったが、蒸ケ湯、大深、後生掛各温泉を視察し、大湯沼、泥火山地帯を一周した。正午過ぎ湯瀬駅に帰って解散した。

17回大会(会長大阪学芸大学教授伊東祐一博士)は、39年7月14日から17日の4日間和歌山県白浜温泉で開催され、出席者138名、研究発表34題を数えた。14日夜の評議員会で、名誉会員に湯瀬温泉の関直右門氏を推せん、病臥中の瀬野評議員見舞の件、会費1,000円に値上げの件、明年度開催地を登別温泉とし、会長に北大教授斎藤省三博士推せんなどの件などが決められ、これらは翌15日午後の総会で可決された。15日は冷房の完備した旅館むさ志大広間を会場は、午前9時大会準備委員長玉置弁吉博士の開会の辞にはじまり、午前中は14題の発表があった。午後の総会において伊東会長は挨拶を兼ね、本年が本学会発足25周年に当るので、その歩みを簡単に報告され、続いて祝辞、議事などがあり、直ちに京都大学理学部湯原博士の「地球上から見たるイタリーの温泉」なる特別講演と、白浜温泉病院院長藤田博士の「白浜温泉の医学的紹介」なる特別報告があった。少憩の後、4題の一般研究発表があり、予定時間を若干オーバーして第1日を終った。夜は同じ場所において懇親会が開かれ、出席者約100名、南白浜町長の歓迎の挨拶、白浜音頭の紹介などあり、和気あいあい裡にお開きになった。

16日は午前中に16題の一般研究発表を終り、午後は約4時間にわたって「温泉に関する諸科学の連繫について」なるシンポジウムが、伊東会長司会の下に医学部門大島東大教授、理学部門野口東京都立大教授担当によって行われ、次の各氏から夫々その専門の問題について提案された。福富北大教授、斎藤北大教授、杉山東北大教授、岩崎東工大教授、梅垣広大教授、八田九大教授、これに対して提案者相互の間、並びに出席会員の間に、多くのデスカッションが行われ、議論の花はいつつきともなく定刻を大分過ぎるに及び、最後に関連諸科学の相互の提携を密にし、温泉学の発達に力をいたすのは、本学会に課せられた重大な使命であると結論づけられて、漸く終了を告げた。これは予期以上の成果を上げることが出来た。続いて今井評議員の閉会の辞で、2日間にわたる大会の講演などに関する幕を閉じた。17日はエキスカージョンの日で、午前中は大型バス2台で千畳敷、三段壁、熱帯植物園、京大水族館など白浜温泉地内を一巡し、A班は正午解散。この参加者80余名。午後はB班約60名が参加して大型、小型各1台のバスに分乗し、途中鮎川温泉に立寄り、湯の峯温泉に向い、直ちに同温泉地内を視察し、準備委員長玉置博士経営の東屋旅館に投じ、同夜は同博士の歓待によって、第2回目の懇親会の観を呈し、一同十分の飲をつくることが出来た。18日は三々五々あるいは壽八丁から新宮方面へ、あるいは十津川温泉郷を経て五条方面と帰路についた。(1964. 12. 31 伊東記)